学道一如

発行
小樽双葉高校
新聞部
2026年9月30日
第35号

あきた総文2026
新聞部門

全国の仲間と協力、貴重な体験

2-2　坂東　元

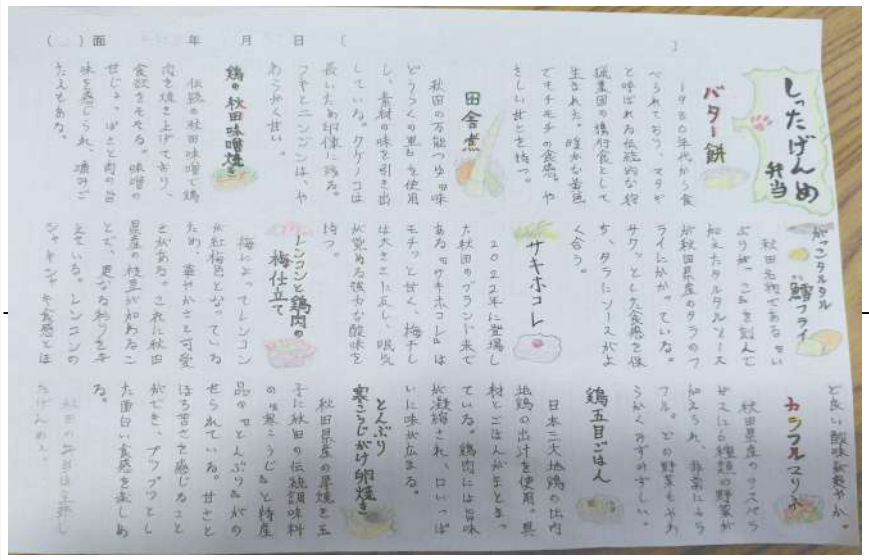
総文祭では班ごとに分かれ、それぞれで取材を行い、新聞を作成するという活動をしました。班は、日本の津々浦々から集まった生徒と顧問で構成されるため、お互い初めて出会った人同士であり、1回きりの新聞制作であるため、最初は互いに責任感や緊張、不安などがあったと思いますが、総文祭の最初に企画されているご当地クイズなどを通して少しずつ打ち解け、協力して制作にあたっていました。初対面であっても仲良くなることは可能であることを改めて感じました。

しったげんめ弁当「食レポ」・イラスト担当

新聞を生徒が最初から作ること、自分の得意ではない物事について取材をし、記事を作成することに対しては非常に苦悩しました。しかし、どんな分野であっても、自分の長所を生かして、出来そうなこと、自分が得意なことに結びつけるなど、自分に合った角度から物事を捉えることで、面白い記事に仕上がると班員や他の班の人の制作を見て感じました。新聞作成で私は、裏面の内、上部にあたる全体の三分の一ほどの記事を担当しました。内容としては取材には直接関係の無い、2日目のお昼に配られた『しったげんめ弁当』という「とてもおいしい」という方言の弁当の食レポについて書きました。食レポとそもそもの構成が適当だったかは分かりませんが、絵を描く事で伝わりやすくできるよう努めることができ、制作していて楽しかったので良かったです。問題は制作時間で、自分の悪い癖で呑気にやっていたせいもありますが、ほぼ丸々徹夜することになってしまいました。なので、新聞を作るということにけじめをつけて、一気に作ることが教訓になりました。

↑左端が坂東くん　↓弁当

↓一箱に詰まったふるさとの味
「しったげんめ」弁当の食レポ
秋田の美味しいものがギュッと詰まっている



熱意・知識・技術を吸収

あきた総文には、新聞に関して優秀な生徒が集結しているため、他の生徒の新聞に対する熱意、作成した記事の完成度の素晴らしさを見て、自分はこんな新聞を作ってみたいと活力を得ることができ、彼らの記事から良さを取り入れることができると思いました。また、自分が直に新聞を作成することで、新聞のレイアウトの構成は如何にすべきか、文章と写真などの資料は如何に配置されるべきかという基礎的な知識を身に付けることができました。やはり実際にやってみなければわからない、感じ取れないことがあると思い知らされました。

災害にどう向き合うか

総文祭の開催中に、熊本を震源とする強い地震が発生し、九州方面で大きな被害が出たことで最終日の来年度の開催地である石川への引き継ぎの際に、能登地震についてのお話がありました。ここでは、新聞部が如何に地震などの災害の被害に向き合うべきか、地震の恐ろしさについて考える時間がありました。能登の地震があった石川県への引き継ぎが行われる今回の『あきた総文』の開催中に熊本県で地震が発生したことは、より地震の怖さのようなものを私たちに伝える結果になったと感じました。

自由に挑戦、型破りの案出して

班の人数が増えたりといったこともありましたが、総文祭という一つの分野で、初めて出会った人と交流して協力することは、新鮮で面白い経験でした。また、作成する新聞などに関しては本当に自由であり、自分が挑戦してみたいことはどんどん進めていき、型破りの案を出したりすると面白いと感じました。そして、戦争や災害など、人間が次への教訓とできる物事に関してより深く考えることができました。

取材へのご協力に感謝申し上げます
第31回全国高校新聞年間紙面審査賞で優秀賞

会場入口で坂東、落合

総文祭2日目に年間紙面審査の結果が発表された。150校の応募から入賞校43校、奨励賞校15校が12月に発表されていた。入賞校の中から最優秀賞5校、優秀賞7校が発表され、本校は優秀賞を受賞した。日頃から生徒の皆さんに快く取材にご協力いただいていることが大きい。あらためて感謝致します。

審査全体講評では生徒との繋がり、生徒会活動、発行回数、地域取材、メッセージ、レイアウトを評価したこと、また今後、主権者として政治的教養を高める必要性があるとも指摘された。

29班（坂東　元）
ここがしったげ新聞

潟上市にあるブルーメッセあきた（道の駅しょうわ）を訪問し、「農聖」石川理紀之助の足跡をたどった。

ブルーメッセは「花の見本市」（ドイツ語）を意味し、花壇や鑑賞温室がある。特に8月のひまわり、12月のポインセチアタワーが注目されている。（下写真）

シクラメンを栽培する佐藤壮真さんは二年連続で農林水産大臣賞を受賞する実力をもつ。「シクラメンは育つのに一年かかり、水やりなど些細なミスで枯れることもある。我が子のように扱っている」と難しさを語ってくれた。

この道の駅には様々な農産物や特産品も販売している。お勧めは地元で獲れたワカサギなどを加工した佃煮だそうだ。

農村救済、農業復興に尽力
石川理紀之助の足跡

石川理紀之助翁立像（道の駅の前）

石川理紀之助は明治から大正にかけて農村の救済や農業の復興に生涯を捧げた。農村の土地や土壌などの総合調査とも言える「適産調」を手がけた。彼は「寝て居て人を起こすなかれ」、人を動かすにはまず自分が率先して行うという言葉を掲げ、自ら質素な山居での生活を選び、餓死寸前の農村を劇的に復活させた。

本は未来への財産

火事によって本を失った悔しさから、火に強いトタン張りの書庫「古人堂書庫」（明治33年）を建てた。そこには「先人の貴重な知恵を火災から守り、未来の子孫が学びによって苦難を乗り越えてほしい」という強い願いが込められている。

歌人、三十万首詠む

石川翁は聖農として農民に尊敬される一方、歌人・貞直として多くの和歌を詠んだ。彼の代表作は次の歌である。

「世にはまだ
　生まれぬ人の耳にまで
　響き届けよ
　掛け板の音」

この歌が詠まれたのは吹雪の日の午前3時頃。彼は農民を眠りから覚まし、仕事をさせるのに、毎朝、掛け板を叩いていた。ようやく掛け板を叩き終え戻った翁に妻がこれほどの吹雪では誰にも聞こえないし、誰も仕事をしようとは思わないでしょうと言ったところ「私はこの村のためだけに掛け板を打つのではない。五百里離れた人、五百年後に生まれる人々へも聞こえるように打っているのだ」と答え、この歌を詠んだ。単に目の前のことだけではなく広い世界と遠い未来を見据えて行動していたことが表れている。

33班（上村泰子先生）
しったげえぇ新聞

秋田の水、風土が育む日本酒、みそ、醤油という日本の伝統的な発酵食品や、八郎湖残存湖で獲れるワカサギなどを使った佃煮といった伝統的な産業を取材した。

貯蔵タンクを背に説明する小玉真一郎社長

こだわりが生む至福の一杯

小玉醸造株式会社は一八九九年に味噌、醤油の醸造を始め、一九一三年から日本酒造りを開始した。代表銘柄「太平山」は伝統的な生酛造りを受け継いでいる。酒造りは新米が収穫される10月から4月まで行われ、酒米は周辺7軒の農家が栽培している。酒造好適米は精米歩号35％まで磨かれ、高品質な日本酒が造られている。

酒蔵から広がる文化の輪
ギャラリー　ブルー・ホール

これはタンク貯蔵庫として使われていた酒蔵をリノベーションしたもので、二〇〇九年に開館した。これまで展覧会などのイベントが開かれ、潟上市に人を呼び込むきっかけを作り、にぎわいを生み出している。

見学した日は永沢蒼衣さんの作品が壁や床に大胆に展示されており、味噌や醤油を魚の一部に取り入れた、酒蔵ならではの作品も見られた。

永沢蒼衣作「流転／全てを生み出す穴」

併設されている蔵ショップでは「酒々だし」、醤油トッピングのソフトクリーム、味噌味のクッキーなど個性的な商品が充実している。

秋田の佃煮
未来へ残す潟と味

老舗の佃煮店、佐藤食品は伝統を守りながら新商品の開発やカフェの営業、「泳げる八郎潟」の環境保全に取り組んでいる。

ワカサギを並べる職人

伝統▼旨味引き出す生炊

専属の漁師が八郎湖で引き揚げたワカサギが直接運ばれ、生炊きという独自の製法で佃煮の柔らかさと旨味を引き出している。また、甘納豆付きイカあられは人気商品だ。

挑戦▼チョコ、ナッツ、みかん

「伝統が残るのは客や時代に合わせて商品が変わるからだ」と代表取締役社長の佐藤賢一さんは語った。チャレンジ精神を大切にし、社員の提案で生まれたわかさぎチョコは全国で話題を呼んだ。また佃煮専門店の若旦那グループでコラボし、メディアの注目度も高い。

若い世代の佃煮離れを防ぐのにカフェ・シュガーをオープンした。お土産に佃煮を見たり、コーヒーにも佃煮がついてくる。

八郎潟を身近に

住民に湖に愛着を持ってもらう、ワカサギが獲れる環境を守ろうと「泳げる八郎湖」にと地域で活動している。